

流山の農業



2017-12-1(省エネ学習会)

温暖化防止ながれやま

事務局 春田育男

資料提供:流山市農業振興課ほか

流山市の農業（現状）



表 1-1

流山市の農業生産額の推移（実質額）

（単位 百万円、 %）

年度平均	1985～89年	1990～94年	1995～99年	2000～04年
農業粗生産	3,081	3,254	3,455	3,615
米	387	348	347	318
いも類	32	28	27	32
野菜	2,544	2,809	2,969	3,141
果実	20	26	40	53
花卉	25	24	65	76
畜産	66	15	2	0
農業粗生産（構成比）	100.0	100.0	100.0	100.0
米	12.6	10.7	10.1	8.8
いも類	1.0	0.9	0.8	0.9
野菜	82.6	86.3	85.9	86.9
果実	0.7	0.8	1.1	1.5
花卉	0.8	0.7	1.9	2.1
畜産	2.1	0.5	0.1	0.0
生産農業所得	1,577	2,177	2,040	1,755
農家1戸当たり生産農業所得（千円）	1,451	2,162	2,199	1,687
10a当たり生産農業所得	216	307	292	260
農業専従者1人当たり生産農業所得	1,053	1,556	1,648	1,682

資料 農林水産省「生産農業所得統計」

表 1-2

専兼業別農家戸数の推移

(単位 戸、%)

	総農家数	販売農家	専業農家	第1種兼業農家	第2種兼業農家	自給的農家
1985年	1,079	853	107	178	568	226
1990年	1,007	765	109	138	518	242
1995年	928	690	98	95	497	238
2000年	827	589	90	80	419	238
2005年	790	477	103	55	319	313
1985年	100.0	79.1	9.9	16.5	52.6	20.9
1990年	100.0	76.0	10.8	13.7	51.4	24.0
1995年	100.0	74.4	10.6	10.2	53.6	25.6
2000年	100.0	71.2	10.9	9.7	50.7	28.8
2005年	100.0	60.4	13.0	7.0	40.4	39.6

資料 農業センサス

2015年

574

268

306

(-27%)

(-44%)

表 1-8

流山市の耕地面積の推移

(単位 ha、%)

	耕地面積	田	畑			
				普通畑	樹園地	牧草地
1985年	749	398	351	341	7	3
1990年	717	377	340	328	11	1
1995年	699	354	345	332	12	1
2000年	698	313	385	368	17	0
2004年	613	206	407	386	21	0
1985年	100.0	53.1	46.9	45.5	0.9	0.4
1990年	100.0	52.6	47.4	45.7	1.5	0.1
1995年	100.0	50.6	49.4	47.5	1.7	0.1
2000年	100.0	44.8	55.2	52.7	2.4	0.0
2004年	100.0	33.6	66.4	63.0	3.4	0.0

資料 農林水産省「耕地及び作付面積統計」

2017年

265 125 123

(-57%) (-40%) (-70%)

表1-10 流山市の品目別野菜の作付面積及び収穫量（2003年）（単位ha、kg、t）

	作付面積	10aあたり収量	収穫量	出荷量
きゅうり	7	5,500	385	339
トマト	7	6,840	479	441
なす	7	3,770	264	184
キャベツ	10	5,090	509	449
はくさい	5	4,500	225	170
ねぎ	141	2,730	3,840	3,620
だいこん	17	5,280	897	764
にんじん	7	3,430	240	217
ごぼう	1	2,350	24	10
レタス	2	2,450	49	45
ほうれんそう	115	1,910	2,190	2,150
かぶ	54	4,080	2,210	2,090
さといも	20	1,350	270	182
スイートコーン	6	950	57	39
えだまめ	75	930	698	661
ばれいしょ	9	2,280	205	109
その他の野菜	56			

資料 農林水産省「青果物出荷統計」

お米

流山市内で、1年間に出荷される「お米」は約630トン。これを市内で全て消費した場合、**市民1人あたりお茶わん約50杯**（1杯84グラム）を食べられる計算になります。

流山市の「お米」の生産は、新川耕地を始めとして140ヘクタールもの水田で栽培され、そのほとんどがコシヒカリです。9月初旬には、黄金色に輝いた稲穂の刈り取りが始まり、美味しい新米が味わえます。



あおねぎ

流山市内から1年間に出荷される「あおねぎ」は約510トン。これを市内で全て消費した場合、**市民1人あたり約17束**（1束200グラム）を食べられる計算になります。

東葛地域内での「あおねぎ」の生産は、昭和26年頃に流山市から始まりました。以来、流山市は品質の高い「あおねぎ」の産地として、広くその名が知られています。



ねぎ

流山市から1年間に出荷される「ねぎ」は約4,070トン。これを市内で全て消費した場合、**市民1人あたり約64束**（1束3本とした場合）を食べられる計算になります。

千葉県内で、流山市の「ねぎ」の出荷量は、第6位を誇ります。特に有名なのは「坊主知らずねぎ」。他の産地では「ねぎ」の生産ができない5月上旬に出荷される「ねぎ」です。



ほうれんそう

流山市内から1年間に出荷される「ホウレン草」は約2,050トン。これを市内で全て消費した場合、**市民1人あたり約45束**（1束300グラム）を食べられる計算になります。

千葉県内で、流山市の「ホウレン草」の生産量は第6位を誇ります。

ホウレン草が一番おいしい時期は、11月から3月です。流山市の「ほうれんそう」は、この期間に出荷のピークを迎えます。



えだまめ

流山市内から1年間に出荷される「枝豆」は約630トン。これを市内で全て消費した場合、**市民1人あたり約8束**（1束500グラム）を食べられる計算になります。

千葉県内で流山市の「枝豆」の出荷量は、第4位を誇ります。「枝豆」は鮮度が高いほど美味しいもの。初夏の味を存分に楽しめるのは、産地ならではの特権です。



流山農業の特性と環境変化

(1) 地理的な特性

◇消費地の中にある農業

本市の農業は人口約17万人と県内でも比較的人口の多い都市の中で展開されています。東京近郊の都市と同様に**農地が住宅と近接**し、消費者に近い場所で農業が営まれており、限られた耕作地と**周辺住民への配慮**を強いられる一方、市民の食卓に近く、**消費地に恵まれ**ているという特性があります。

◇都市型の多角的農業経営

都市化の進展によって農地が減少し、農村地域のようなスケールメリットを活かした農業は困難となりつつありますが、小規模な農地を有効に活用しながら、少量多品目による**個人直売、共同直売、近隣スーパーマーケット等への直接契約出荷、学校給食への契約出荷**を行うほか、一部では**体験農園**等を経営するなど都市部の農業として市民との交流も行われています。また、限られた農地での耕作では収入拡大が困難なこともあり、固定資産税や相続税の税負担への対応として、本市の多くの農家では、他の都市部と同様に「**農業＋不動産業等**」という多角的経営を行っています。

◇農業以外の産業との距離

都市化の進展と交通網の発達は、市内に商業、工業の発展をもたらしますが、一方で、都内へのアクセス向上により、市内農業者の他産業への就業機会の向上をもたらすようになり、東京近郊の他の都市部と同様に、農業者は次第に他の産業での収入確保を求めるようになり、**兼業農家への移行と非農家化が進んでいます。**

本市における昨今の新規就農者は、定年あるいは親が農業を継続することが困難になったことを契機に会社を辞めて農業を継ぐケースが多い状況です。

(2) 外的環境変化による影響

◇放射能汚染による影響

本市においては、東日本大震災を発端とした東京電力(株)福島第一原子力発電所事故による放射能汚染の影響により、野菜、米、果樹、花き等の農作物については、食品衛生法に基づく放射線量が基準値以内で安全であるにも関わらず、ホットスポット報道等による風評被害で、販売量や販売価格の下落が生じました。

◇つくばエクスプレス沿線開発による影響

つくばエクスプレスの開業に伴う区画整理事業の進行は、**農地の減少**に拍車をかけるものとなっています。このため、他の都市部と同様に農地の小規模化と分散化が進み、スケールメリットのある農業ができなくなり、また新たに農業機械の移動に費やす時間が多くなるなど、農作業の効率性の低下が進んでいます。更に、**住宅地との近接化により、土埃や農薬の飛散による耕作上のトラブル**が懸念され、農業者の心理的なストレスが高まる状況を招いています。スーパーマーケットでは、「**地元産農作物コーナー**」が設けられ、生産者側は販路の拡大とともに消費者が市内産農作物を消費する機会が増え、民間主導の地産地消活動が進んでいます。

流山市農業の課題

- (1) 減少を続ける経営耕地と増加する不耕作地
- (2) 農業就業人口の減少・高齢化と後継者不足
- (3) 農住混在化に配慮した安定的な営農活動
- (4) 市民の農業への理解と協力
- (5) その他（国策への対応、新川耕地の土地利用）

地産地消



地産地消のメリット

<消費者のメリット>

- * 新鮮な農産物を買うことができる。
- * 消費者が生産者の顔や生産方法を知ることができ、安心して買うことができる。
- * 「旬」のものや伝統的な食文化を知ることができる
- * 流通にかかる経費を節減できることから、安く購入できる。
- * 生産者と交流ができる

<生産者のメリット>

- * 流通にかかるコストが安くなり、所得の向上につながる
- * 生産者が直接販売することで、少量の産品、不揃い品、規格外品も販売できる。
- * 消費者のニーズを知ることができ、効率的な生産を行うことができる。
- * 耕作放棄地を防止でき、地域特産物の継承や農業技術を守れる。
- * 新鮮で栄養価の高い食材を提供できる。

<その他のメリット>

- * 地球環境への負荷を軽減し、エコロジーに貢献できる
- * 食育の実践に役立つ
- * 食糧自給率の向上にも役立つ

「フード・マイレージ」とは

○ 「食料の総輸送量・距離」

○ 考え方は単純

: 食料の輸送量に輸送距離を掛け合わせた指標。

単位:t・km(トン・キロメートル)

○ 特色

食料の供給構造を物量とその輸送距離により把握

- ・ 食の安定供給、安全性の確保(トレーサビリティ)
- ・ 「食」と「農」の間の距離の計測
- ・ 食料の輸入が地球環境に与える負荷の把握

cf. 食料自給率: 距離の概念を含まず。

(2) 輸送経路と距離の概念図



アメリカから日本までの輸送経路(仮定)

:ワシントンDC(首都) → ニューオーリンズ(輸出港) → 東京(輸入港)

[直線距離]

[海上輸送距離]

輸入食料の輸送に伴う環境負荷の試算

(1) 国内における食料輸送に伴うCO2排出量

2000年度におけるCO2排出量 : 1,237百万t

うち食料品_____ : 9百万t

(輸送量、エネルギー消費量シェアであん分)

(2) 輸入食料の輸送に伴うCO2排出量の推計

わが国の食料輸入に伴うCO2排出量 : 16.9百万t

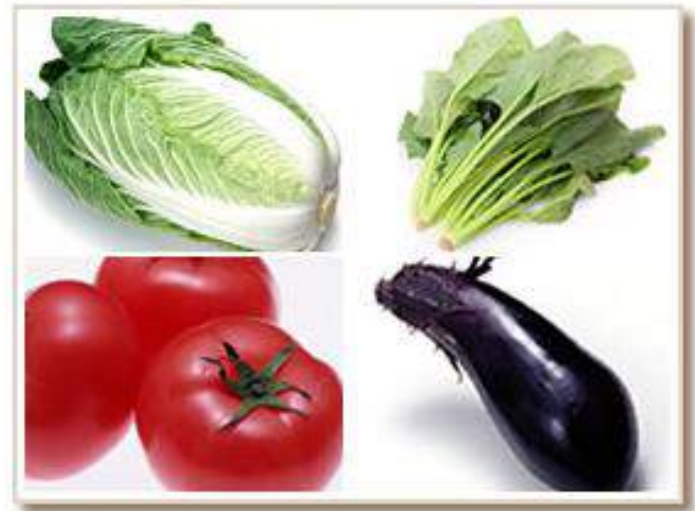
(フード・マイレージにCO2排出係数を乗じて試算)

→ (2) / (1) = 1.87倍

体を冷やす野菜

ここでは冷やす野菜を具体的に紹介します。

- レタス
- キャベツ
- 白菜
- ほうれんそう
- 小松菜
- きゅうり
- トマト
- なす
- ゴーヤ
- セロリ
- もやし
- おくら
- 大根



体を温める野菜

温める野菜には何があるかというと・・・

- にんじん
- ねぎ、たまねぎ
- ごぼう
- れんこん
- かぼちゃ
- 生姜
- にら
- にんにく、にんにくの芽
- 山芋
- ふき
- こんにやく
- 赤唐辛子



地元野菜で寒い冬を
乗り切りましょう！

